

販売店・工事店のためのオール電化講座

給湯や暖房、調理など家庭内のエネルギー源のすべてを電気で賄う「オール電化住宅」が増えている。背景には安全・安心、健康・清潔、快適志向、さらに環境を守ろうという意識の高まりがある。「Switch!キャンペーン」で、オール電化住宅の普及を推進している東京電力はじめ、電力各社の積極的な取組みも大きな要因となっている。本冊子は『電波新聞』に掲載された、東京電力による「販売店・工事店のためのオール電化講座」をまとめた。

目次

1. オール電化住宅とは？
2. オール電化は住まいのトレンド
3. 快適空間づくりの秘訣
4. オール電化住宅の経済性
5. 京都議定書とオール電化
6. エコキュートとは
7. エコキュートの機能とタイプ
8. エコキュート採用優遇制度
9. IHクッキングヒーターとは
10. IHクッキングヒーターの使い心地
11. IHクッキングヒーターを選ぶ
12. 高気密・高断熱住宅とオール電化暖房
13. 床暖房
14. エアコン暖房と蓄熱式電気暖房器
15. 電力会社のショールーム活動
16. エコキュートの購入補助
17. オール電化住宅専用ローン
18. マンションでの採用事例
19. 戸建て住宅での採用状況
20. 東京電力の普及・啓蒙活動

2. オール電化は住まいのトレンド

設備の進化で急速に普及

前項では、「オール電化住宅」が環境に優しく、安心で清潔、快適で便利な住環境を実現し、さらには光熱費の削減も期待できることをご紹介しましたが、オール電化住宅の普及状況はいったいどうなっているのでしょうか。図1をご覧ください。図1をご覧ください。急速に普及が進んでいることがご理解いただけます。

「オール電化住宅」が急速に普及した理由として、まずは設備の進化があげられます。電化機器というと、「クッキングヒーターの火力が弱い」とか、「電気温水器が湯切れする」など、ネガティブな印象をお持ちのお客さまが多かったのが現状ですが、ここ数年で飛躍的に性能や使い勝手が向上しております。IHクッキングヒーターは、ガ

スに負けない火力と電気の強みを生かした便利機能や掃除のしやすさなどが人気で、急速に普及が進んでいます。

一方、電気給湯機も、追い炊き機能やスイッチ一つでお風呂の湯張りから保温までできるフルオートタイプや、空気の熱でお湯を沸かす経済性に優れたエコキュートの登場により、順調に普及が進んでいます。

また、次項で詳しくご紹介しますが、住宅の高気密・高断熱化の進展も「オール電化住宅」の普及の追い風となっています。

実際に「オール電化住宅」にお住まいのお客さまには、おかげさまで大変ご満足いただいております。その中でも、「安全性」「光熱費の安さ」「家事が楽」などの項目については何れも高い評価をいた

だいております(図2)。このように、「オール電化住宅」に関する注目度は非常に高く、今後とも市場拡大が十分期待できる分野となっております。

いることから、住宅業界の方々からも注目をいただくうになりました。

図1. オール電化住宅の普及状況
オール電化住宅の累計着工戸数の推移(全国)

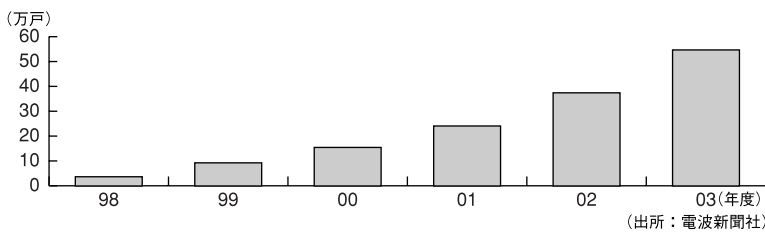
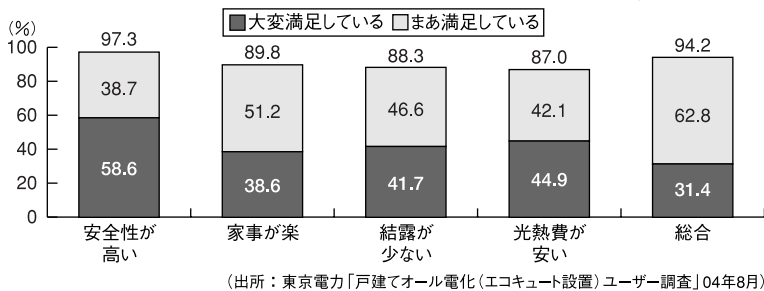


図2. オール電化住宅にお住まいの片の満足度
オール電化住宅入居者の満足度 N=713



販売店・工事店のためのオール電化講座

3. 快適空間づくりの秘訣

高気密・高断熱住宅+オール電化

快適空間づくりの秘訣は「高気密・高断熱住宅+オール電化」です。まずは住宅の「高気密・高断熱」に目を向けて見ましょう。

現在の住宅は、住む人の快適性、安全性と共に、地球環境問題への配慮としてエネルギー消費量の少ない住宅が求められています。

古来、日本の住宅は、暑い夏を涼しく過ごすことを重視しており、断熱性や気密性は低く、冬は非常に寒いつくりでしたが、高気密・高断熱住宅にすることによって、室内の上下温度差がつきにくく、暖房していない廊下などの温度も下がりにくい。さらに、暖房室の壁面などの温度が高く体感温度が高いなど、室内の快適性を向上させることができます。

統計的にみると、冷房に比

べて暖房は年間を通じて10倍以上のエネルギーを消費しています。そこで、冷暖房機器が普及した今日では、住宅性能を上げて高気密・高断熱化することにより、少ない空調エネルギーで室内の温熱環境を快適に保つことが重要となるのです。

目安は次世代省エネルギー基準

快適で省エネルギーな高気密・高断熱住宅では、断熱・気密・換気の3要素が重要となります。これらの性能の指標となるのが、住宅の省エネルギー基準です。

1980年に定められた住宅の省エネルギー基準は、今までに2回の大きな見直しがあり、現在は1999年に改正された基準が最も厳しい基準となっています。この基準は通称「次世代省エネルギー基準」と呼ばれており、一般

的にはこの基準を満足することが高気密・高断熱住宅の目安とされています。

オール電化住宅が最適

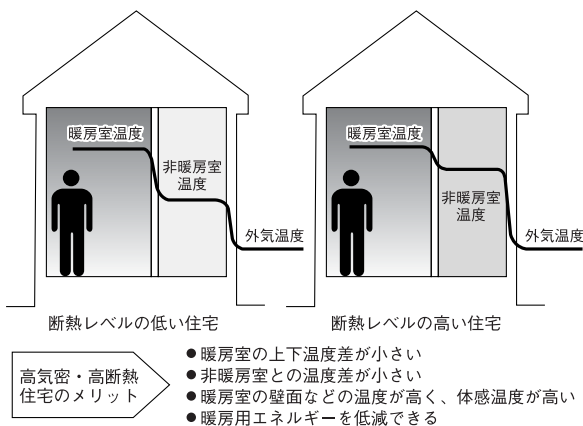
高気密・高断熱住宅は、快適な半面、自然換気量が少ないので、建物の腐朽やカビの原因となる結露や室内の空気汚染に配慮することが必要です。

また、排ガスなどの汚染空気が増えると換気量も多く必要となり、換気による空調エネルギーのロスで、せっかくの高気密・高断熱住宅の性能が発揮しにくくなります。

この問題を防ぐためには、室内で水蒸気を過剰に発生させないことや、燃焼ガスを室内に放出する開放型の暖房器具を使わないこと等が大切になります。

I H クッキングピ

高気密・高断熱住宅の特徴



ーターや、エアコン、蓄熱式電気暖房器などの設備機器は室内での燃焼がないため、オール電化住宅にすると、燃焼による排ガスや水蒸気の排出がなくなります。つまり水蒸気や汚染空気を嫌う高気密・高断熱住宅との相性は抜群のため、「高気密・高断熱住宅」には「オール電化住宅」が最適なのです。